



参拝の枝折



下北半島總鎮守

田名部神社

36代宮司 小笠原 壽 美

青森県むつ市田名部町1-1 電話 (0175) 22-7470・22-3022



田名部神楽（下北神楽）の元祖といわれる栗山の神楽



拝殿

田名部神社の由緒

当下北半島總鎮守田名部神社の創立年代は元和二年（一六一六）に類焼のため不明であるが、康永四年（興国二年・一三四一）の鰐口が焼かれている。

寛永十二年（一六三五）盛岡城事務日記によれば、当大明神は関東宇都宮二荒山より万民守護のため宇曾利山に御飛来、大平村荒川一本松に鎮座のところ、二十二代先別小笠原丹後靈夢により田名部村に動座し社格五千石神領百石を有し海邊總鎮守・北郡總鎮守・田名部大明神と尊稱され、高台に鎮座していたが、元和二年に社殿記録等が焼失したとしている。

下北半島は平安鎌倉時代より明治十一年明治政府により郡制が施行され奥州南部北郡が上北・下北の二郡に分離されるまで、田名部とか田名部通と稱していた。

應仁のころから天下はおおいに乱れ、北郡各地には南部氏に統治されるまで、小笠原・蠣崎・菊池・工藤・安宅・新谷・広瀬の豪族がいたが、南部氏の統治により蠣崎氏は松前に移り、工藤氏は根城南部氏の籍に入り、安宅・広瀬氏は藩命により三戸の切谷村に転じ、小笠原氏は民に帰し現在に至った。小笠原には、宮内・宮田・坂本・菊池・葦谷・赤星等の一族郎党がいた。

宮田勝盛は小笠原磐美の祖で、射術の達人であった。南部二十九世重信公、八戸南部始祖直房公の御号の御師範であった。（南部藩参考諸家系図）

江戸時代の祭典

田名部通りには、本村三十四ヶ村支村六十五ヶ村があり田名部町を中心に関根から北を北通り大平から西を西通り、現在の東通村は東と稱し、根城南部氏が統治していたが、寛永四年二月（一六二七）宗家南部氏の懇望により根城氏は田名部通を宗家に譲渡し遠野に移った。

宗家南部氏は田名部町に代官所を置き、田名部通の村々を支配した。

当神社は歴代南部公を始め庶民の崇敬が篤く、大祭には南部公代参としての田名部代官参社のもとに祭典が執行され祭典の開始と終了は早馬で盛岡の本藩まで報告された。

田名部通り本村三十三ヶ村からは、それぞれの村名を記した燈籠が献燈され、大畑町は延享元年（一七四四）、川内町は安永六年（一七七七）に町名を許され、検断宿老を置いたので大燈籠の献燈が許されていた。

この大畑と川内の大燈籠は三十三燈籠の双排といわれた。

江戸時代の神輿渡御行列帳に見える山車、神楽

山車 横迎町町印稻荷山（豪川組）

小川町々 猩牲山（義勇組）

柳町々 大黒山（共進組）

本町々 蛭子山（明盛組）

新町々 救世堂（新盛組）

栗山大神楽——目名大神楽



本 殿



田名部祭り

例大祭

往く夏を

惜しんで燃える五車の別れ



田名部神社略記

社名 田名部神社

むつ市田名部町一の一鎮座

社号 海辺總鎮守 示現太郎大明神

祭神 味耜高彥根命

(あじしきたかひこねのみこと)

誉田別命

宇曾利山大山祇大神

管下神社大神

年中祭

一月一日	歳旦祭
二月一日	厄祓
六月三十日	大祓
八月十八日	大祭
八月二十日	大祭
十月十五日	七五三詣
十一月十五日	七五三詣
十二月三十日	大祓

南 十 部 郡
 北 加 賀 郡 伊 野 郡
 和 加 賀 郡 岩 手 郡
 稗 貫 郡 鹿 角 郡
 九 戸 郡 三 戸 郡
 志 和 郡

